

2009 年香港 YMCA 学生受け入れプログラム：

日本語会話クラスの実践報告

山田 一美・山田 勇人

Hong Kong YMCA Students Exchange Program 2009:

Report on Japanese Conversation Class

Kazumi Yamada, Hayato Yamada

抄 録

大阪女学院では、2009年6月21日から7月13日まで香港YMCAより交換留学生の受け入れを行った。このプログラムでは日本語クラスも設けられ、本学の学生がその日本語指導を担当した。授業はタスクによる会話を中心に進められ、その指導内容から教授方法まで本学学生が中心になり組み立てられた。さらに、この日本語会話クラスでは、日本語教育を通じた異文化交流という目的の下、本学学生が日本語会話の授業において直接指導にも当たった。今回の日本語会話クラスは、香港の学生から好評を受け、また、香港の学生にとっても本学の学生にとってもお互い有益なものとなった。

キーワード：日本語教育、タスク、異文化交流

(2009年10月2日受理)

Abstract

Osaka Jogakuin College accepted two students from Hong Kong YMCA as exchange students, from June 21 to July 13 in 2009. The aim of the program is to enhance cross-cultural exchange. Many activities and classes were included in the program. In this report, one of those classes, a Japanese conversation class in which nine OJC students were in charge of teaching, is described. The Japanese language class focused especially on conversation, giving the two Hong Kong students several tasks which were indispensable for their stay in Japan. With the aim of enabling the Hong Kong students to achieve such tasks, OJC students considered the teaching contents and how they themselves could teach them. Through the class, OJC students were able to experience teaching the Japanese language. The Japanese class was well received by the Hong Kong students, too. The Japanese class was useful for both Hong Kong and OJC students.

Key words : Japanese language education, task, cross-cultural exchange

(Received October 2, 2009)

1. はじめに

本学では、2009年6月21日より2週間、香港 YMCA より短期交換留学生として2名の学生を受け入れた。このプログラムでは本学学生との交流をはじめ、大阪城訪問、日本に関する講義などとともに、日本語クラスも設置され、会話中心の日本語の授業を行った。本プログラムの主な目的は「学生間の異文化交流」であることから、今回の日本語クラスでは日本語教師が授業を行うのではなく、本学学生が指導にあたった¹⁾。

本稿では、今回の日本語クラスの概要を報告するとともに、本学における今後の国際交流プログラムにおける日本語クラスの在り方への示唆も行いたい。

2. 日本語会話クラスの概要

2.1 対象学生

香港 YMCA から派遣された学生（以下、香港学生）は2名の女子学生である。彼らは、来日経験もなく、また日本語学習歴もほとんどなかった。今回のプログラムによる滞在期間は2週間程度であり、また、帰国後に日本語を使用する必要も、機会もないため、当初は日本語学習に対するモチベーションが心配された。しかし、今回の受け入れプログラムに日本語学習の時間も是非組み込んでほしいという彼らの強い要望から、日本語学習に対する動機の高さが窺えた。

2.2 日本語会話クラス担当の本学学生

今回、本学学生に向けて、プログラムに協力するボランティアを募集した。その結果、応募が多数あったため、選考が行われ²⁾、その中から、交際交流や日本語を教えることに興味がある学生9人が選ばれた³⁾。彼女たちは自発的に応募してきた学生であり、最後まで熱心に取り組んでくれた。しかし、本学では日本語教育関連科目は設置されておらず、ほとんどの学生は日本語教育の基礎的な知識はないため、プログラム開始前に日本語教育の概論的な講義を受けた。

2.3 日本語会話クラスの目標

このクラスでは、香港学生が日本滞在期間中、遭遇する場面において日本語で対応できる会話力を身につけることを目標とした。彼らの日本語学習歴、日本滞在期間、また、帰国後は日本語を特に必要としないことを考慮し、文字学習は行わず、会話中心に授業を進めていった。また、日本語を指導する本学学生とのやり取りを通して、同年代の日本人との交流を図り、現代の日本事情を知ることを目指した。

2.4 日本語会話クラス担当の本学学生の配置

日本語クラスは1回2コマ授業（1コマ1時間）が5回、計10時間行われた。香港学生は

2人とも日本語学習歴がほとんどないため、レベル分けの必要はなく、同一のクラスにした。指導に当たる本学学生が9人いるため、まず、二人1組のペアを作り、1回の授業をその2名で担当させた。前半の1時間では一人がメイン教師となり、もう一人はアシスタントになる。メイン教師は、語彙、文型の導入・練習を行い、アシスタントは教材提示の補助などを行う。そして、後半の1時間でメインとアシスタントを交替し、必ず1時間はメイン教師として日本語を教える形態をとった。

3. 日本語会話クラス担当の学生への指導

3.1 日本語教育に関する講義

前述した通り、本学では日本語教育関連科目が設置されていないため、本プログラム前に日本語教育に関する講義を行った。講義は、独立行政法人国際交流基金関西センターの非常勤講師である山田勇人（以下、山田）が担当した。本講義では、山田が本日本語会話クラス用に作成した枠組み（3.2 表1参照）に基づいて、それぞれの学生が担当する教授内容や教授方法などの確認を行った。本学学生は日本語教授経験がないことから、具体的な練習方法の一案、板書の仕方など、細かい点まで指導を受けた。プログラム開始まであまり時間がなかったため、講義の内容は理論的なことより、上記のような実践的なことに重点を置いた。

3.2 日本語会話クラスにおけるタスクの選定、及び、教案作成指導

香港学生2名の日本語学習歴、プログラムの期間、帰国後の日本語使用機会などを考慮し、タスクによる会話中心のクラス⁴⁾を設定した。「タスクによる」とは、彼らが日本滞在期間中に遭遇する言語場面を想定し、その場面で日本語を使用し、自分が必要とする事柄が遂行できることを目的とした教授アプローチである。

今回、授業で扱ったタスクは

タスク1 挨拶する。自己紹介する。

タスク2 買物をする。

タスク3 食事に行く。

タスク4 家族を紹介する。

の4つである。日本語会話クラスでは、それぞれのタスクの遂行に必要な語彙、表現（文型）を教えていく。例えば、タスク3「食事に行く」では、語彙として食事のメニューや助数詞（ひとつ、ふたつ…）が、表現では「すみません、～をください」がタスク3の指導項目となる。この他にもこのタスクを遂行する上で、香港学生から要望があれば、適宜、語彙・表現を加えていく。そして、最終的にそのタスクが日本語で実行できることを目指した。

この4つのタスクは山田が抽出した。本学学生にはタスクを遂行する上で必要な語彙・

表現の選定、及び教授方法を考えさせた。これまで日本語教育に携わったことがない学生が大半であったことから、山田からそれぞれのタスクを遂行するために最低限必要な語彙・表現を参考として与えた。以下は、上記タスクを含めた日本語会話クラスの大まかな枠組みである。

表1：日本会話クラスの枠組み

	1 コマ目		2 コマ目	
	タスク	基本文型 (山田提示)	タスク	基本文型 (山田提示)
1 回目	タスク1 挨拶する 自己紹介	自己紹介 わたしは（名前）です 私は（職業）です 国は（国名）です お名前は？ お仕事は？ お国は？ 私は～ではありません	タスク2 買い物する	～をください ～はいくらですか
2 回目	タスク2 買い物する	～はどこですか。 例) お手洗いはどこですか。 シャンプーはどこですか。 シャンプーは～の近くです。	タスク3 買い物する (実際に買い物を行う)	
3 回目	タスク3 食事に行く	これは～です。 これは～ですか。 これは～ではありません。 これは何ですか。	タスク3 食事に行く (実際に食事に行く)	
4 回目	タスク4 家族を紹介する	例) 私の家族は～人です。 ～と～と～です。 父は学校の先生です。 父はやさしいです。	発表スクリプト 「私の家族」作成	
5 回目	文化紹介 (若者カルチャー)		発表（私の家族）	

本学学生にはこれらのタスクを遂行するためには「どのような語彙や表現が必要なのか」という課題を与え、実際の授業細目（シラバス）を学生自身で作らせた。その際、「その語彙や表現は日本語を初めて勉強する学生には適切か」「2時間という時間で教えられる内容か」という注意事項を与えた。また、参考として日本語の初級教科書である『新装版 はじめてのいっぽ 英語版』を配布し、実際の日本語クラスではどのような語彙・表現を

教えているのか学生に提示した。しかし、これらはあくまでも参考にとどめ、香港の学生が日本の先生や大学生に自己紹介をするには、どのようなことを言えばいいのか、大学生が必要とする買い物の言葉にはどのようなものがあるのか、またどのような表現を使って、買い物をすればいいのか、自分たちで考えさせた。教授方法についても学生に考えさせ、それをまとめたものを教案として提出させた。学生の教案チェックは筆者らがし、授業内容に適切ではないものは省いたり、また不十分だと思われる点を付け加えるなどした。香港学生が高い英語力を有していること、本学学生が英語を専攻していることから教授方法は直接法⁵⁾ではなく、英語を媒介語として使用することを勧め、できるだけ、タスク遂行のための練習に時間を割くよう指導した。

3.3 学生の教案

以下は、3回目の授業の2コマ目に行われた「食事する」の教案の一部である。

数詞を教えたあと、レストランで使うダイアログを練習する。(25分)
練習後、カフェか食堂で実際に練習する。(25分)

助数詞は、ほとんどのシチュエーションで「〜つ」を使えるので、他に「〜個」「〜枚」を教える程度で、ダイアログを中心に練習する。

ダイアログ

Kyaku: Sumimasen.	すみません。	Excuse me.
Tenin: Hai.	はい。	Yes.
Kyaku: Kore wa nan desu ka?	これは何ですか？	What is this?
Tenin: Kore wa udon desu.	これはうどんです。	This is udon.
Kyaku: Kore wa karai desuka?	これは辛いですか？	Is this spicy?
Tenin: Kore wa karaku arimasen.	これは辛くありません。	This is not spicy.
Kyaku: Udon hutatsu kudasai.	うどんを2つください。	Two udon, please.
Tenin: Wakarimasita.	分かりました。	I see.

この「食事する」のダイアログの場面は「学食」が設定されている。「食事する」というタスクであれば、通常はレストランなどが設定されるが、学習者が大学生で、彼らが最も食事する場面が学食であることから学食に場面を設定しているのは大変興味深い。

以上のように、今回のタスクによる会話中心のクラスには学習者のニーズに合わせた有

意義な活動も取り入れられた。「買い物する」のタスクでは、最後に大学の近くのコンビニへ行きタスクを実行するという活動も行っている。以下は、そのタスクを行うための準備段階である2回目の授業（1コマ目）の本学学生の教案である（斜体部分は、筆者らがコメントとして加筆した部分）。

● 日本語のプラン

大きく分けて2つのパートに分けます。

① 自己紹介（日本語で）

- ・ 名前
- ・ 国名

→派生して「はじめまして」と「よろしくお願いします」

(5分ほど)

**前の時間に自己紹介をやっていますので、まず学生に自己紹介をさせ、同じ表現を使って今度は〇〇さん<学生名前>が自己紹介をしてあげるといいでしょう。*

私は（名前）です。

私は ～から来ました。 *という表現が前の授業導入されているので、この表現を使いましょう。*

② 買い物「どこにありますか」（「どこですか」は場面によっては不自然に聞こえる為。 Ex、「コーヒーはどこですか。」等）

** 「～にあります」は「どこですか」より難しいこと、すでに「～は～です」という文型が入っていることから「～はどこですか」のほうがいいと思います。*

- ・ 食べ物、日用品
飲み物、パン、シャンプー、歯ブラシ等

- ・ 場所
トイレ、駅、警察、病院、スーパー等

→派生して 「あそこです」（あそこにあります）

「ここです」（ここにあります）

「そこです」（そこにあります）

* 感覚を掴む為に実際に模擬レクチャーをします。A（あそこ）、B（そこ）、C（ここ）の
の書いた紙を離れた3つのテーブルに置きます。例えば「〇〇はどこにありますか」
と聞いてもらい、先生は答えます。それを生徒にA、B、Cどこの場所を指している
のか答えてもらい、繰り返す。

また生徒自身が日本で使うと思う単語があれば、それを教えてあげて練習してみる。

(30分ほど)

いい流れだと思います。

あと、

_____ Wa _____ desu ka.

というように、文型をしっかり提示してあげましょう。その際、板書はローマ字表
記で。

● 時間があれば・・・

テキスト Grammar 1、3、4、5

- ① すみません。
- ② いくら？
- ③ ～ください。
- ④ これ、あれ、それ

「〇〇をください」で練習。A、B、Cのカードを使う。

- ⑤ 〇〇は（どこに）ありますか。

→「どこに」を省いただけなので覚えやすいと思います。

(15分ほど)

* 次の時間にこれらのフレーズを使って、数字の復習を交えて練習します。また、
実際に外に出てみて実技してみます。

前述のとおり、タスクによる会話中心に行うため、ただ語彙や表現を教えるだけでなく、
そのタスクを実際に行うことができるかまで授業内に取り組んだ学生が多かった。また、
その語彙・表現も通常の日本語教師が教えるものとは違い、彼らの視点で考えたものであ
り、日本語教育を専門とする筆者らにとっても興味深いものであった。また、タスク4「家
族を紹介する」では、最後のまとめとして本学教員らを前で家族紹介をさせ、日本語学習
の成果の発表の場とした⁶⁾。

4. 授業の様子

これは、授業の様子である。お互い年齢が近いこともあり、和やかに授業は行われた。

写真1



写真1は、「挨拶と自己紹介」をテーマとした1回目(1コマ目)の授業である。ホワイトボードの前に立つ左側の本学学生がメイン教師となり、説明をしながら板書をしている。右側の学生は、メイン教師の教授と香港学生の学習がスムーズに進むように気を配りながら、アシスタントの役割を果たしている。

写真2

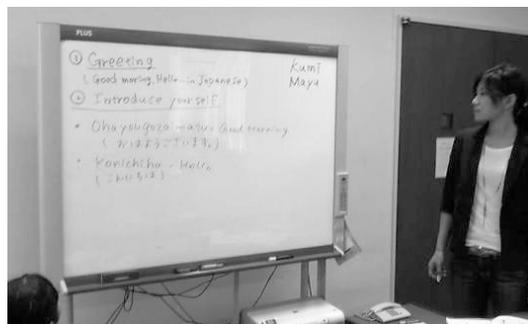


写真2は、1回目の授業での板書の様子である。香港学生のニーズを分析し、日本語会話授業では、文字指導は行わず、タスク中心の授業を設定した。そのため、板書で使用するのは、ひらがなやカタカナではなく、アルファベットのみである。

写真3



写真3は、「文化(若者カルチャー)」をテーマとした5回目(1コマ目)の授業の様子である。この回の指導にあたった本学学生たちは、自分のバイト先である塾での様子や友だちを写真に撮り、パワーポイントで紹介をしながら、仕事の内容、ファッション、興味があること、いま流行っている音楽、テレビ番組などを英語で紹介した。さらに、音楽のフリーペーパーなども用意し、配布していた。

5. 学生の感想

以下、香港学生の感想、及び、日本語会話クラスの指導にあたった本学学生の感想の中から、いくつかを紹介する。

<香港学生>

- In these two weeks, me and Cathy have five Japanese conversational classes, it held by OJC volunteer students. We've learnt some numbers and some words that for our daily life. One of the lessons, two volunteer students, Tomomi and Yoshie taught us how to ask people something in a shop, and they gave us a list, we went to a convenience store and brought those things by ourselves.
- During the 2-weeks-visit, we attended the conversational Japanese lessons which were organized by the OJC students. I appreciated with their preparation work in which we could learn quickly by effective practices. We could apply what we had learnt for greeting, for ordering food in restaurant, for buying souvenir in the shop.

<本学学生>

- 初めて日本語をちゃんと教えたので、やりがいや楽しさ+難しかったです。「おもしろい」という日本語を聞かれ、教えると「This class is おもしろい」って何度も言ってもらえました。また、授業もスムーズに進みました。授業中に使用した図は「わかりやすい!」と評判がよかったです。
- 日本語の授業はとても楽しく行えたと思います。山田先生に頂いた study plan（添削バージョン）も全て時間内に終わってしまい、「○○ wa ○○ desu.」という文型を使い、何か出来ないかと考えたところ、「好きな食べ物」（私は○○が好きです。）で代用できるのではないかと考え、日本の食べ物 and 大阪の食べ物を少しだけですが、紹介することが出来ました。また、2人ともすごく教えやすかったです。授業内に、「この単語、言い回しは日本語で何て言うの??」等の質問もたくさん出て、教え甲斐があり、また自らも多くのことを学びとることが出来ました。貴重な経験が出来たと思っています。ありがとうございました。

6. 今後の課題

今回の日本語クラスは、上記の学生の感想にあるように、香港の学生にとっても本学の

学生にとってもお互い有益なものであった。実際、日本語クラスは幸いにも双方の学生から好評であった。香港の学生にとっては、日本滞在中に必要な日本語が学べたこと、同年代の日本人学生と日本語を通して交流できたことは有意義であったにちがいない。一方、本学の学生にとっては、外国からの留学生と交流できたこと、日本語を教える機会が得られたことであろう。とはいえ、今回のプログラムに際して、日本語教育という観点からすれば準備不足は否めなかった。原因として、本学学生と今回の日本語クラスの打ち合わせ時間が決して十分ではなかったこと、そもそも本学には日本語教育関連科目がほとんどなく、学生もその知識を持ち合わせていないことが挙げられる⁷⁾。にもかかわらず、すべての日本語指導を学生に担当させるにはいささかの無理があった。プログラムの主な目標が学生間の交流ということもあるだろうが、日本語を教えるにはそれなりの知識と準備は必要であろう。今回のプログラムの第一の目的が「学生の異文化交流」であることを考えれば、学生が学生を教えるという方式は大変意義のあるものである。しかし、「日本語を教える」ということを念頭に置くのであれば、日本語教育の専門家が日本語クラスを担当し、学生はそのアシスタントとして関わるのが理想の形と言える。今後、日本語の授業時間数がさらに多く設定されたプログラムが実施される場合、学生のみで対応するのは技術的にも不可能であり、日本語学習の成果を求めるのは困難と言えよう。

注

- 1) 通常日本語教育を行う目的は、学習者の日本語力向上を目指すことである。しかし、今回の日本語会話クラスは、その教師役を本学学生が務めることによって、教えている彼ら自身も異文化を体験し、彼らの学習の場として日本語教育が活用されたという点は興味深い。
- 2) 国際交流委員会委員長の崔大龍教授と、事務局（国際交流センター）の高木芳子さんがボランティア学生の募集と選抜に関わってくくださった。
- 3) 内訳は四年制大学の4年生2名、3年生7名である。日々の授業スケジュールと日本語クラスの日時が重なっていないということ、そして、1,2年生は今後もまだチャンスがあるため、3,4年生が優先ということが考慮された。
- 4) タスクの定義にはさまざまあるが、本稿では杉山（2008）の「目的を達成する手段として言語（日本語）を用いる日常生活の一場面」の定義と同一である。
- 5) ここで言う直接法とは、学習者の母語や第三の言語を使わずに、学習者が学ぶ言語そのものを使って教える方法（平高 2009）のことである。
- 6) 発表の際、長井茂准教授から香港学生への貴重なコメントをいただいた。
- 7) 本学では短期大学の2年生時に「日本語学」が開講されている。しかし、今後も海外からの学生を受け入れ、今回のような会話クラスを開講するのであれば、「日本語教授法」などの日本語教育関連科目を、早い時期にカリキュラムに加えていくことが必要だろう。そして、それらの科目を履修した学生が海外からの学生の日本語指導に当たるというのが、日本語教育を通じた海外からの学生たちとの異文化交流を目的とした枠組みにおいては理想的と言えよう。

参考文献

- 石田敏子（1995）『改訂新版 日本語教授法』大修館書店
- 小柳かおる（2002）「Focus on Form と日本語教育研究」『第二言語としての日本語の習得研究5』第二言語習得研究会
- 杉山ますよ 他（2008）「TBLT（Task-based Language Teaching）による初級総合教材－タスク：「店で身の回りの品を買う」－」『日本語教育 実践研究フォーラム報告2008』日本語教育学会
- 春原憲一郎他（2006）『新装版はじめのいっぽ 英語版』スリーエーネットワーク
- 平高史也（2009）『新版 日本語教育事典』大修館書店